

## 塩飽諸島の歴史と文化

塩飽諸島の住民は、古くから瀬戸内海の通商と海上交通で生計を立ててきました。備讃瀬戸海峡の危険な海流での操船に長けた地元の船乗りたちは、16世紀に塩飽水軍として知られるようになり、瀬戸内海においてはもちろん、遠くにまで名を馳せました。織田信長（1534年～1582年）、豊臣秀吉（1537年～1598年）、徳川家康（1543年～1616年）など、時代の最も強力な武将はこれらの船乗りを高く評価しました。雇って船を任せただけです。これは大きな責任を伴う名誉ある職業でした。税金の支払い手段であった米などの貴重品の輸送や、高官の移動に使われていたからです。塩飽の船乗りの貢献は中央政府によって認められました。中央政府は17世紀初頭までに、他のどの地域にも許可しなかった自治権の一形態を島々に与えたのです。

1720年代までに、塩飽水軍の役務に対する需要は減少し、もはや航海だけで生計を立てることができなくなりました。多くの人々が造船に目を向け、海に関する知識を利用して、当時の日本で最も進んだ船を建造しました。造船業は、1700年代から明治時代（1868年～1912年）まで塩飽諸島で繁栄し、一部の造船工は四国全域や本州の近くの地域で一般的な大工仕事を行い、神社、寺院、家屋を建てました。塩飽大工によって建てられた宗教的建造物のいくつかは、香川県と岡山県に今も残っています。第二次世界大戦後、島の人口は高齢化が進み減少し始めましたが、観光業が今や塩飽諸島に新たな希望を与えています。塩飽の全盛期を思い出させる歴史のおよび文化的な場所が島に点在しており、瀬戸内海地域のより有名な目的地とは異なるのんびりとした魅力を提供しています。本島と高見島は瀬戸内国際芸術祭の共催地でもあります。